

『徒然草』成立論における第一部中断と 第二部再執筆の要因について

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

上 島 眞智子

A Study of the Reasons for Kenko's Interruption and Resumption of His Writing of '*Tsurezuregusa*'

KAMIJIMA Machiko

Abstract

Although we do not know exactly when Kenko wrote *Tsurezuregusa*, among other reserchers, Yasuraoka consistently emphasized the important fact that Kenko discontinued writing and resumed it more than 10 years later, through which his work was greatly enriched. Yasuraoka, however, did not particularly stress on the reasons why Kenko discontinued writing in his thirties and later resumed. This strange lack of explanation always makes me wonder why he does not refer to the mystery. It seems that what matters is not when it was written but what was written.

From that viewpoint, Yasuraoka's theory is not sufficient. Based on his theory, I would like to clarify these reasons for this interval and analyze the changes in Kenko's writing style brought about by the break, from various viewpoints to understand the work better, which has had a great influence in Japan as a work of classical Japanese literature.

Key word

Tsurezuregusa, two different parts, changes in his writing style

『徒然草』成立論における第一部中断と

第二部再執筆の要因について

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

上 島 眞智子

はじめに

『徒然草』全段の成立は、橘純一氏の史実に基づいた考証によって元弘元年（一三三一年）頃とし、それが今日まで成立時期として定説とされている。元徳元年（一三二九年）八月頃から以後元弘元年（一三三二年）九月二十日までの約一、二年の間に書かれたとする説であり、以来これを基軸として諸説の成立論が展開されてきた。西尾実氏は成立時期は橘説と同じだが、三十段あたりで前後の成立を異にするという二部説を提示し、安良岡康作氏は「徒然草概説」で、それらを基盤として修正した三十二段までを元應元年（一三一九）第一部成立とする二部説を展開している。その他高乗勲氏の二部説、永積安明氏、宮内三三郎氏の三部説その他諸説がある。第一部と第二部には書かれていない題材にも明らかな違いがあり、筆者は現在のところ、年代考証等最も説得力のある安良岡二部説を支持する立場にある。但し、本稿の目的は成立の時期を論じることにあるのではない。二部説であれば十年以上空白の時間があり、歳月の経過による思想的な深まりや題材など第一部と第二部に違いがあるはずである。それぞれの特徴を考察するとともに、何時という視点でのみ論じられてきた成立論を、何故という視点から、第一部が中断された要因と、第二部がどのような契機によって再び執筆されたのかという点について考察していく。この事は安良岡説をはじめとして従来の成立論研究ではほとんど検討されていない。その点を言及することによって『徒然草』の成立と作

者兼好に対する新たな視点を付加したい。

一 『徒然草』第一部の理想と中断の要因

第一部の特色について、安良岡康作氏の「徒然草概説」では、

第一部について指摘できることの第一は、その中にはつきりと認められる無常思想・無常観が極めて感傷的、かつ詠嘆的であって、世間の諸事情が絶えず変遷を続けていることに、兼好は深い悲しみを感じているのである。このことは、早く西尾実先生によつて把握され、「第三十段あたりまでの無常観は、世の中が無常であることを悲しんでいる、感傷的な、生活感情としての無常観であり、詠嘆的な無常観である」（「つれづれ草の世界観」と指摘されている。そして、この無常観が、『徒然草』に先立つ、『方丈記』や『平家物語』のそれと相通するものであることも指摘されているのである。（五六五ページ）

と第一部の感傷的・詠嘆的無常観について述べている。はたして第一部はそうした無常観でのみ書かれているのであろうか。

「無常」には、「すべてのものが移り変わっていくこと」と、そこから転じた「死」そのもの意味がある。『徒然草』の中に書かれている「無常」の用例をあげると、「移り変わっていくこと」の意味で書かれているのは

そのゆゑは、無常変易の境、ありと見る物も存ぜず。

（第九十一段）

其心と云ふは、他の事にあらず、人間常住の思ひに住して、仮にも無常を観ずる事なかれ。

（第二百十七段）

凡、鐘の聲は黄鐘調なるべし。是、無常の調子、祇園精舎の無常院の声なり。

（第二百二十段）

がある。また、「死」の意味で書かれているのは

人は、たゞ、無常の身に迫りぬることをひと心に掛けて、束

の間も忘るまじきなり。

(第四十九段)

無常の来たることは水火の攻むるよりも速やかに：

(第五十九段)

閑かなる山の奥、無常の敵、きほひ来たらざらむや。

(第百三十七段)

(引用は「新日本古典文学大系『方丈記 徒然草』」であり、『徒然草』の中では二つの意味が混在して書かれている。これらの用例はすべて第二部に書かれているものであり、第一部では直接「無常」という表現を使っている箇所は一例もない。

「概説」では

あだし野の露消ゆる時なく、鳥辺山の煙立ちも去らでのみ：

(第七段)

家居のつき／＼しくあらまほしきこそ飯の宿りとは思えど興あるものなれ。

(第十段)

風も吹きあへずうつろふ、人の心の花に、馴れにし月日を思は、あはれと聞きし言の葉忘れぬものから、我が世の外になりゆくならひこそ、亡き人のわかれよりもまさりてかなしきものなれ。

(第二十六段)

等をあげ、直接「死」を指す例ではなく、「すべてのものが移り変わっていくこと」の観照として無常と表現し、その無常思想を「空気のように鎌倉期の社会を包み覆っていた気分」と書いている。さらに第二部ではその無常思想は「動かすことの出来ない、厳然たる事実であり、真相であることの諦観を確信している」とし、「兼好の無常観は、気分的、感情的な第一部のそれから、原理的、諦観的な第二部へのそれへと、大きな発展と飛躍を示していることになる」と述べている。安良岡説では、変化の結果のみを捉え、この無常観の違いが一部の断絶と二部の再執筆にどのような影響を与えているのかについて言及をしていない。

『徒然草』第一段では、「いでや、この世に生れ出でば、願はしかる

べきことこそ多かれ」と、「願はしかるべきこと」の対象は社会的身分をはじめとして、人格、趣味・教養など、多岐にわたる。それについて兼好の持論を展開している。天皇や皇族さらには摂関家、それに準ずる高い身分の家柄の貴族に対しては、「ゆゆし」「なまめかし」と賛美しているが、それ以下の貴族に対しては手厳しい。出自は変えることが出来ないし、容貌や品性も生まれつきの要素が強い。だが、それ以上にあらまほしきことは、人間的魅力と才能である。どんなに容貌が優れていても、才能を磨かなければ結局は見劣りがしてしまう。さらには字が上手で声がよく、お酒もほどほどに飲めるような男がよいなどと並べ立てる。しかし、そこまで要求することは望みすぎと考えるのか、「いでや」という言葉には、人間はそうした理想を求めるが、求めても得られないのもまた人間なのだという感慨がある。「ありたきこと」「願わしきこと」は、理想と現実には距離がある、という前提を内包した言葉であり、人間の理想とその限界を冷静に計っている見方や観察は、兼好の対象に対するシニカルな視点を含みつつも均衡のある認識を表している。第一段の「ありたきこと」にあげられている漢字、漢詩、和歌、音楽、有職などの由緒正しき知識は、王朝貴族の身につけるべき望ましい教養であり、兼好の人生においても第一義のものである。遁世に到るまでには、幾多の屈折を経験したのである兼好の心の中に今なお、宮廷での経験を背景にした王朝的理想が色濃く存在している。

第二段は「よろづにきよらをつくしていみじと思ひ、所せきさましたる人」を批判し、順徳院の「おほやけのたてまつる物は、疎かなるを用ゐてよしとす」という言葉を引用して、治世者の望ましい心がけを語っている。第三段は、王朝物語の主人公のような若き男の「色好み」「ぶりを」「をかし」「あらまほし」と評して、兼好自身の現実の体験を越え、その恋愛観を美的な理念にまで昇華させている。第四段は「後の世のこと心に忘れず、仏の道うとからぬ、心にくし。」の一文だけである。『徒然草』最初の注釈書である秦宗巴の『つれづれ草寿

命院抄』では、

此段尤殊勝也。源氏カホル大将ナドノ行跡思ヒ合スベキ也。前三段に大カタ人間界ノアラホシキ事ライヒツクシ此段ヨリ後世ニウツル次第眼ヲ付ベキ也。

という。宗巴は薫大将との類似を想起させ、その次にあらまほしき焦点を王朝憧憬から仏道世界に変化させている。「忘れず」「うとからぬ」は第一段の「ひたふるの世捨て人」より更にあらまほしき遁世者の姿である。それを「心にくし」と述べる。続けて第五段では「頭おろしなど、ふつゝかに思ひとりたるにはあらで（中略）配所の月、罪なくて見んことも、さも覚えぬべし」と顕基の中納言の言に共感を示している。兼好自身の遁世の心境と重ねて、隠遁者としてのあらまほしき境涯を述べた段である。以下第一部を三十二段まで兼好の「ありたきこと」「願はしきこと」の持論が展開されるのである。

『徒然草』が書かれた鎌倉後期という時代の気分は、まさに無常に覆われていたに違いない。作品中でも、前述の第七段、為政者に関連する第二十五段、二十八段、親しいを人偲ぶ二十九段・三十段はそうした詠嘆的な無常観が色濃く表れている。だがそれ以外は、遁世を果たし、環境にも慣れ、落ち着いてきた兼好の、むしろ詠嘆とは対照的に、社会と人間の諸相を自らの思念をもとに表現しようという試みがある。先行文学である『枕草子』の、跋文を序段に受け継ぎ、第一段の「ありたきこと」「願はしきこと」などでは「ものづくし」の言説形態を取り入れ、心に思う独自の思想を自由に展開しようという意欲があつたと思われる。

宮中生活で身につけた、王朝の雅への憧憬を書いた段は、第一段・第二段・第二十二段「何事も古き世のみぞ慕はしき。……」第二十三段「衰へたる末の世とはいへど、猶九重の神さびたる有様こそ、世つかずめでたきものなれ。……」第二十四段「斎宮の野の宮におはします有様こそ、やさしくおもしろきことの限りとは覚えしか。……」等がある。理想的な隠遁生活への志向を書いた段は、第四段・第五段・第

十三段「ひとり灯の下にて文をひろげて、見ぬ世の人を友とする、こよなう慰むわざなり。……」第十七段「山寺にかき籠りて仏に仕ふまつること、つれづれもなく、心の濁りも清まる心ちすれ。」第二十段「なにがしとかやいひし世捨て人の『この世のほだし持たらぬ身に、たゞ空のなごりのみぞをしき』と言ひしこそ、まことにさも覚えぬべけれ。」第二十一段「よろづのことは、月見にこそ慰むものなれ。……」等がある。

第一部では、こうした二つの思念が兼好の心に交互に立ち上がり、兼好自身が価値観を確認している感がある。第一部は兼好の三十代に書かれている。第一段の理想や願望は、断続しながらも主調底音のよう第三十二段まで貫かれていて、隠遁の表現者という少し位置を変えた視点から、人間考察に踏み出す兼好の思想形成における核となっている。

無常は鎌倉という時代の空気として確かにあつたし、兼好も勿論その空気を吸っていた。しかし、こうして各段の内容を取り上げてみると、必ずしも「感傷的・詠嘆的」無常観や、諸事情に対する「深い悲しみ」ばかりが強調されているわけではない。兼好の隠遁の動機は不明であるが、後二条天皇崩御から数年を経た時期で、天皇の死による直接的な決断ではない。後二条天皇の死は堀川家に関わる兼好の立場を左右し、隠遁の遠因としては見逃すことはできない事項であると思うが、兼好自身が、身分や昇進に関わらない隠遁という生き方を選んだのであり、成し遂げるまでの逡巡や苦悩の日々の結果であることは『家集』33、37から伺い知ることができる。自由な職業選択の道がないう時代であり、宮廷役人を退くこと＝隠遁というのが当時の図式であれば、兼好の出家は、第五段の顕基の中納言の言に対する共感に示すように、「ふつゝかに思ひとりたるにはあらで」長い日々深く考え、自らの意志をもつてなされたものである。兼好が身をおいた隠遁生活における自由と孤独は、深い思索の日々をもたらした。そして、とらわれない境遇において、第七段の「いかにもののあはれもなから

ん」「もののあはれも知らずなりゆくなん、あさましき」という無常観を詠嘆するという消極的な諦念だけではなく、恋愛論(第三段)、官能的誘惑論(第八段・九段)、藝能論(第十六段)、四季の移り変わりにおける風物論(第十九段)など、多様性を受容するという価値観を積極的意思として獲得していった。第一部には、隠遁後のまだ若い時期の兼好が、未完成ながら思想性を伴って精神を形成していく足跡を見る事ができる。

前述したように「概説」では、無常観の他に、歴史的な事実在即した綿密な考証によつて、第三十二段までを第一部とする説が述べられているが、何故、第三十二段で中断したのかについては言及されていない。他の先行研究ではそうした見解を論じたものはほとんどない。だが、二部説による第一部の中断に言及しているものに、島内裕子氏の『兼好』がある。第一部を三十八段で中断したとし、分ける段は異なっているが、「少なくとも執筆行為に対する懐疑と逡巡、そしてそれに伴う精神的な断絶があったのではないか。あれほどまでに自分自身の考え方や価値観を根底から検証し直して、これ以上このまま徒然草を書き進めることができようか。しかもそれまでの自分の理想主義的な、言ってみれば自分の外部に理想のモデルを求めるような生き方までを否定し去ったのだから。」と述べ、次の三十九段とそれまでとの世界観の違いを取り上げている。第三十八段までを第一部とし、第三十八段からの「脱力状態」(二九九ページ)とする第三十九段をもつて第二部のはじめとする二部説の根拠の是非はともかくとして、「理想を求めて張りつめていた」生き方を否定し書き進めることが出来なかったという、中断の理由として、島内氏が理想論の限界を提示していることは納得できる。

以上で考察したように、第一段の理想を主調底音として以下の思想を展開をしているのであるが、それを軸として書き進めていくには自ずと限界がある。隠遁して数年後の、兼好自身の境涯も未だ確立していない頃である。表現する内容に更なる視点を獲得する事が出来ず、

一旦筆を休めたと考えざるをえない。このことを一つの要因としてあげたい。更に別の要因として、兼好を取り巻く環境に着目して考察してみたい。

二 『徒然草』と『家集』の位置と中断の要因

兼好の生涯は、出家以前は、堀川家の家司・後二条天皇の宮廷役人、隠遁してからは『徒然草』執筆、そして二条派の四天王といわれた歌人である。

『徒然草』の作者兼好の在世中の名声は歌人としてであり、随筆家としてではない。ただ出家当初から著名であったかというところではない。歌を作っていたのは早い時期からであるが、関連の先行研究により、勅撰集に入集したのは、元応二年(一三二〇)二月に撰進された『続千載和歌集』が最初である。『兼好法師家集』には『徒然草』執筆前に詠まれた歌と特定できる歌も含まれ、若い頃から歌は詠んでいた。歌詠みが書いた随筆であれば、当然、そのいくつかの歌や、当時の心境を回想した歌が作品の中に採択されていてもおかしくはない。しかし自作の歌を『徒然草』には一首も載せてはいない。歌会などで人と関わって評価を伴う表現世界と、『徒然草』という散文という一個人で、物事の本質を深くえぐり出そうとする世界とは、兼好の内部では最初から切り離す意志があったのであろう。

『家集』の冒頭に五項目について兼好の編集方針が示されている。五項目の「詞事」には「如二日記物語等一長書続。又歌合判詞是非故実等、以レ次書。」とあり、詞書を日記や物語のように長く書くと記している。兼好自身の日常や行動は『徒然草』ではほとんど書かれていないが、『家集』の詞書によつて幾分推測することができる。

『徒然草』を書き始めた頃は、隠遁者となつて数年の歳月が経つてゐる。『続千載和歌集』以前の歌として出家に到る心境や修学院、横川での修行・隠遁時代などいくつもの歌が『家集』に載せられている

が、あくまでも個人的に詠んだ歌であって、歌人として歌会などの場で詠んだものではない。そうした中で、僅かに次の歌が場を特定出来る。

祭主定忠卿身まかりて、追善に結縁経の歌すゝめはべりに、方便品

26 おしなべてひとつにはひの花ぞとも春に逢ひぬる人ぞしりける

後二条院の書かせ給へる歌の題の裏に、御経書かせ給はむとて、

女院より人々によませられ侍りしに、夢に逢恋

57 うちとけてまどろむとしもなき物を逢ふと見つるや現なるらん

堀川の大臣を、岩倉の山庄にをさめたてまつりにし又の春、

67 そのわたりの藤を取りて、雨降る日申しつかはし侍りし
さわらびのもゆる山辺をきて見れば消えし煙の跡ぞかなしき

〔引用は「新日本古典文学大系」『中世和歌集室町篇』所収「兼好法師集」〕
26番の歌は大中臣定忠の追善に詠んだ歌である。『公卿補任』を見ると、大中臣定忠は花園天皇の延慶二年（一一三〇）に従三位、神祇大副、祭主として初めて名前が掲載されている。正和五年（一一三六年）一月十七日出家（依病也）。同二四日卒。四十五歳である。つまりこの歌は追善供養の歌である。また、それ以外的大中臣定忠と兼好は、神官の家出身、かつて仕えた堀川具守の二日前になくなった人という以外に特に個人的関係を示す資料は見あたらない。兼好に「結縁経の歌をすゝめ侍りし」人はだれであるのかも不明である。

「新編国家大観第六私歌集編Ⅱ」によると定忠は「柳風和歌抄」の歌人でもある。井上宗雄『中世歌壇史の研究 南北朝期』の「柳風和歌抄」の記事に次の引用がある。

浜口博章氏は作者の官位記載によつて延慶三年三月く十二月の

間の成立で、鎌倉歌壇の、ほぼ当代生存歌人の詠を集めたものらしく、名称は柳営における風艸の意で、撰者は爲相でないか、と推定する（鎌倉歌壇の一考察）。これに基づいて福田氏は延慶三年二月爲世・為兼激突のさ中に東下した爲相が、自分の力量を幕府当局に認めさせる為、或は勅撰集を撰ぶ際の資料・準備として撰んだのであらうと推測する。（「延慶両卿訴陳状の成立」『国語と国文学』昭和三十七年七月）

とある。定忠とは神官の家での関わりなのか、或いは関東下向をしている（『家集』）兼好にとつて、ここに書かれている鎌倉歌壇の一人であつた定忠と何らかの接点があつたのか、或いは定忠の勅撰集初入集は爲世撰の『新後撰和歌集』なので、兼好周辺の二条派の人物をとおして親交があつたのかもしれない。こうした場で歌を詠むということは、何らかの交流があつたと思われる。

57番の歌は、徳治三年（一一三〇）に崩御した、後二条天皇の追善供養のために、母である西華門院の主催した場での歌である。一周忌・三周忌、最も遅い時期は七回忌など考えられるが、特定することはできない。いずれにしても、兼好の歌としては早い時期の歌の一つであり、出家以前の歌の可能性が高い。兼好は後二条天皇の時代は宮廷役人であり、西華門院の生家の堀川家の家司であつたことはほぼ定説である。徳治三年の後二条天皇の没後から正和二年（一一三三）の山科小野庄六条有忠所有の田一丁歩購入までの間に兼好の出家があることも定説である。

67番の歌は、大中臣定忠と二日違いの正和五年（一一三六）一月十九日に出家し、即日亡くなったかつての主・堀川具守の一周忌にあたる正和六年（一一三七）に詠んだ歌である。

この三つの「追悼歌」は、いずれも世に認められた歌人として、歌会などでの場で詠まれた歌ではない。あくまでも人間関係等による立場での歌である。

ところで、兼好が二条爲世に師事した機縁はどこにあるのだろうか

か。当時の歌壇は、俊成・定家の御子左家が三家に分裂し、その中でも二条家と京極家が、勅撰集の撰者の地位をめぐる対立していた。兼好の生涯とほぼ同時期に編纂された勅撰集の下命者と撰者を見ると、歌壇の勢力は皇統と深く結びついていることがわかる。撰者の地位をめぐる対立していた二大勢力のうち、二条家は「大覚寺統」、京極家は「持明院統」と、皇統の対立と構図を同じくしている。兼好が歌人として始めてその名を記したのは二条為世撰『続千載和歌集』である。大覚寺統の、後二条天皇に仕え、後二条天皇の外戚である堀川家の家司であつたとされている兼好は、歌人としては自ずと二条派に近い立場であつたと思われる。

また別の角度から当時の歌壇の様子を見ると、石田吉貞『中世草庵の文学』（北沢図書出版 一九七〇年二月刊）では、勅撰集に新入した僧と女性という対極をとりあげ、その人数と歌数を比較している。それによつて二条派と京極派が新人歌人に対してどのような受け入れの傾向を持っていたかを如実に知ることができる。二条派撰の勅撰歌集ではすべての勅撰歌集で僧が人数・歌数ともに女性の約二倍であるが、京極派撰の勅撰歌集では女性のほうが三・六倍と圧倒的に多く、二つの派は極端にその傾向を示している。また同書にはその僧について次のように書かれている。

然らば、二条派関係の集に入れられている僧というのは、いかなる身分の僧か、その内容を見ると、何といつても、最も多いのは、京都附近の大寺院の僧正とか僧都とか法印とかいう人たちで、真の隠遁者ではないが、しかし、法師・上人、即ち大体から隠遁者、又はそれに近い者とみてよい人々が、約半数を占めているのを見ると、二条派と隠遁者との関係が、相当密接であつたことと思われる。男性歌人の数は、両派の集による差が殆ど無いのであるから、これをやや強めて言えば、京極派の集は宮廷的色彩が濃厚であり、二条派の集は僧侶的又は隠遁者の色彩が濃厚であると言つてもよいと思う。即ち隠遁者は、多く二条派に属してい

たと言つてもよいと思うのである。(一一四ページ)

このような二条派と隠遁歌人の密接ぶり、二条派為世と大覚寺統の関係、その大覚寺統後二条天皇の宮廷官吏で、天皇の外戚堀川家の家司であつた兼好は、自ずと二条派歌壇圏の一員であつた。

兼好の『続千載和歌集』入集以前の歌人としての動向を示す史料がないので、師である二条為世の活動の中で関連の事項を調べて見ると、正和四年(一一三五年)為世主催の「花十首寄書」に十七名出席している。その作者は、

民部卿殿・中納言入道殿・富小路大納言殿・三条相公・宰相中将・法性寺三本品・隆長朝臣・具行朝臣・為明・幸鶴・国冬・其任・其村・法印長舜・淨弁・頼阿・慶運

であり、それぞれが花に因んだ歌を詠んでいる。奥書に、

花十首和歌寄書

亀岡東林寺前花下會

正和四年三月五日也

同十一月十日書写之

と書かれている。

この中には、後年兼好もその名を連ねる二条派の和歌四天王といわれる淨弁・頼阿・慶運は揃つて出席している。しかし兼好の名前だけが見えない。

〔継塵記(實任記)〕⁷⁾和歌會事の文保二年(一一三八年)正月十一日に

(前略) 早且新中納言重送 云、今日會必可來云々、中一點向彼亭々主・小倉中納言入道・富小路前中納言・中院中納言・新中納言為藤・隆長朝臣・成房朝臣・為定朝臣・忠守朝臣良兼法師・隆淵僧都・淨弁・頼阿・慶運等會合(下略)

とある。作者實任は「公卿補任」文保二年を調べると「花十首寄書」にも出席している三条相公である。この中にも和歌四天王の他の三人の名前が見えるが、兼好の名前はない。京都にいなかったという可能

性もあるが、それ以外の兼好の歌壇での活動の記録はなく、『家集』を読む限り、この時期における歌会の題詠歌も特定できないので、そうした場に出席する立場にいなかったと思われる。この当時の兼好の個人詠や前述の「追悼歌」はあるが、歌人としての兼好の活動の記録は残っていない。これ以前の在俗中にも歌詠みとして格別に注目された存在としての記録はない。従つて、歌人としての認知は『続千載和歌集』入集まで待たなければならぬ。ただ、歌人としての公的な記録は残っていないものの、全くの無名の歌人が勅撰集に入集するわけではないであらう。兼好の二条派での存在感を暗示するものとして、関東へ旅立つ折りに、道我と交わっている歌がある。

東へまかり侍りしに、清閑寺へ立ち寄りて、道我僧都にあひて、

秋には歸りまでくべきよし申しかば、僧都

70 し かぎり知る命なりせばめぐり逢はん秋ともせて契りおかま

返し

71 行末の命を知らぬ別れこそ秋とも契るたのみなりけりと詠みあつた歌である。道我は兼好と同年齡で兼好と同じく『続千載和歌集』に初入した勅撰歌人であるが、『続千載和歌集』では法印道我と書かれていますので、この歌はそれ以前の二人共勅撰集に入集していない時期である。道我は清閑寺・大覚寺・東寺の僧正を歴任した後宇多天皇側近の高僧である。『徒然草』第百六十段にも書かれているが、二人が親しくなつたのは、二条派の歌友としてであらう。こうしたことから兼好は『続千載和歌集』撰了以前に二条為世に師事し、為世や二条派の歌人の間で歌の実力が認められていて、その推挙による入集と考えられる。

『徒然草』第一部が書かれたのは（正徹本他でも続けて書かれているので二部とは別物ではない。）元應元年（一一三九）である。その直後に『続千載和歌集』が撰進されている。後宇多院から『続千載和

歌集』の撰者為世への勅命の時期は、『徒然草』第一部執筆時期とほぼ重なっている。翌元應二年（一二三〇）『続千載和歌集』巻十八雑下に兼好は一首入集している。

題しらず

兼好

二〇〇四　いかにしてなくさむものぞ世の中を背かて過ぐす人にと
はばや

三十七歳の時である。後年二条派の和歌四天王と言われる四人、浄弁・兼好・頼阿・慶運の中で最も遅い時期の歌壇での認知と言わなければならない。

この直後と思われるが、104番の歌の詞書に「後宇多院よりよめる歌どもめされ侍りけるに、たてまつるとて、僧正道我に申つかはし侍りける」とあり、ためらいと喜びの歌を詠んでいる。また、当時二条為世・為藤は旬会・月次会など頻繁に歌会をおこなっていた。兼好もこうした会に参加していたことは『兼好法師家集』の58番他の詞書が示している。官吏を退いて隱遁歌人として生きていく道を選ばざるをえなかった兼好は、勅撰集入集以来、歌人としての活動が飛躍的が増え、呼応するかのよう⁸に兼好の二条派での評価が高まっていく。以下兼好の活動をたどると、「細川文庫蔵の『古今和歌集』奥書の報告」に

元亨四年十一月十六日 兼好判

正中元年十二月十三日以家説

授兼好了

前亜相判

とある。『古今和歌集』の書写や二条為世より『古今和歌集』を受講している記録が残されている。同じ正中元年、為世撰の『統現葉和歌集』に兼好は三首入集、翌正中二年（一三二五）成立の『続後拾遺和歌集』に兼好は一首入集している。

二条派の総帥為世はこの当時七十歳を越えた高齢であつたが、『続千載和歌集』に続き、その選外佳作編である私撰歌集『続現葉和歌

集』を編纂している。歌会はもとより弟子育成にも力を注ぐなど、精力的な活動をしている。二条派の後継者藤の逝去もあり、後継となる為定はまだ三十歳過ぎの若年で、それを支えるためにも、当時二条派に集まっていた実力のある法体歌人に強化結束をゆだねなければならぬ事情もあった。それが兼好等への秘伝の家説の「古今伝授」をはじめとする『三代集』の相伝につながっているのである。兼好を取り巻く情況は一変し、歌会の出席や歌人としての研鑽の日々が始まり、『徒然草』を執筆する「つれづれなる」時間や環境が奪われていったと思われる。

こうした生き方を『徒然草』成立論の視座として、もう一度関連事項を整理すると、『徒然草』第一部が書かれた翌元應二年（一二二〇）は、兼好が初めて勅撰和歌集（『続千載和歌集』）に入集した時期である。勅命が下されたのは『徒然草』第一部成立とされる元應元年（一二二九）、下命者は後宇多院、選者は師である二条為世。おそらく為世の推薦もあったことだろう。道我を通じて後宇多院から歌を召されたこともあり、右に上げた事項が示すように、兼好の歌人としての本格的な活動と多忙な日々が始まったのである。

こうした、第一部終了前後からの、歌人兼好としての環境の変化によって、兼好には、落ちついて『徒然草』を執筆する環境が失われてしまった、と考えざるを得ない。

兼好は在俗中の家司・宮廷役人時代には世に知られた歌人でも随筆家でもない。出家後から『続千載和歌集』入集までの間には、歌会出席等の題詠歌を伺わせるものはほとんどなく、『徒然草』第一部を書き始めた頃はまだ勅撰集には入集してはいない。歌人としての活動が始まった時には『徒然草』は中断されている。こうして一つの事に比重を置く兼好の生き方も大きく作用し、勅撰集入集後の兼好の多忙を、第一部が中断せざるを得なかった二つめの要因として提示したい。

三 第二部再執筆の要因

『徒然草』の第一部中断の要因を別の位相から考察すると、後二条・堀川家に関連する動向が微妙な形で影響していることがわかる。血縁をつないでいくと、当主堀川具守（右大臣）、女子の後宇多天皇妃の西華門院、孫の後二条天皇、後二条天皇の皇子である邦良親王、そして、具守の直系には長男具後早世のあとを受けて当主を引き継いだ堀川具親がいる。家司であり、宮廷官吏であった兼好が、在俗中に深く関わった社会圏である。兼好の実人生を示すものが多い『家集』を見ると、後二条天皇については次の歌がある。

後二条院の書かせ給へる歌の題のうらに、御経書かせ給はむとて

女院より人々によませられ侍しに、
夢に逢ふ恋を

57 うちとけてまどろむとしもなき物を逢ふとみつるやうつゝなるらん

天皇の母である西華門院が供養のために催した追悼の歌会である。門院主催ということもあり、縁のある「人々によませられ」たに違いない。兼好がこの席ににいるということは天皇及び門院とそうした関係にあったということである。堀川具守については次のような深い繋がりを感じている。

堀川の大臣を、岩倉の山庄にをさめたてまつりにし又の春、
そのわたりの藤をとりて、雨降る日申しつかはし侍し

67 さわらびのもゆる山辺を来て見れば消えし煙の跡ぞかなしき
堀川具守が亡くなった時で、「をさめたてまつり」の主語が兼好であることをみると、彼自身が堀川家に関わりの深い実務者の一人であったと思われる。さらにその翌年の春、その山庄近くに眠る具守を偲んで延政門院一条と歌を交わしている。邦良親王との交流については

正中二年、春宮より歌合の歌めされ侍しに、山路花、
稀逢窓

108 けふも又ゆくての花にやすらひぬ山わけごろも袖にほふまで

先坊御時、御歌合につかうまつりし五首、元享三年の
ことにや

157 秋ふかき霜をきそふる浅茅生にいく夜もかれずうつころも哉

前坊御まえに月の夜、権大夫殿さぶらはせ給て、御酒な
どまゐりて御連歌ありしに、候よし人の申されたりけ
れば、御さかづきをたまはずとて

278 a までしばしめぐるはやすき小車の

といひをかれて、つけてたてまつれとおおせられしか
ば、たちはしりて逃げんとするを、長俊の朝臣にひき
とどめられしかば

わかゝる光の秋にあふまで

と申す

等がある。春宮、前坊、先坊いずれも邦良親王のことである。元享三年、正中二年の詞書きによつて、邦良親王と兼好は出家後も交流があったことがわかる。この歌は当初『家集』の最後の歌であつたはずである。『家集』には二八六首の歌が書かれている。荒木尚校注『兼好法師集』（『新日本文学大系 中世和歌集室町篇』岩波書店一九九〇年六月刊）にも、斉藤彰校注『兼好法師集』（『和歌文学大系』明治書院 二〇〇四年七月刊）にも最後の八首は兼好の晩年に付け加えたものとしている。兼好自筆の『兼好自撰家集』の複製本（尊経閣叢刊 前田徳育財団 一九三〇年刊）で確認しても、兼好の筆跡であるが、それまでのすつきりとした勢いのある筆の運びとは異なつていて、同時期に書かれたものでないことは明らかである。278番は加筆前最後の歌で、歌の形態が『家集』中では唯一の連歌である。連歌であるから最後においてという見方できるが、それ以上に誰との連歌であるかを注目すべきである。邦良親王の主催する宴で、親王との

いかにも親しく楽しい掛け合いのこの278番の歌であつたことを思うと、歳月を経てもなお兼好の心の中にいつまでも残り続けていた光景だつたのだろう。前坊とあるのでこの詞書は、邦良親王が亡くなつた後に書かれたものである。その関係は兼好にとつて宮廷生活からの交流であり、親王の死によつて、後二条・邦良という宮廷との繋がりが切れてしまふのである。

延慶元年（一二〇八）に後二条天皇が崩御し、それから三、四年の間に兼好は宮廷役人を退き、その後隠遁している。正和五年（一二二六）かつて仕えた堀川具守が没し、その二、三年後の文保二年（一二三二）頃から兼好は『徒然草』第一部を執筆している。さらには嘉暦元年（一二三六）に278番の歌を詠み合つた、後二条天皇の皇子である邦良親王が二十七歳の若さで亡くなつてゐる。その二、三年後に再び『徒然草』は書き始められた。そして元弘元年（一二三二）頃までに『徒然草』第二部が成立している。右の状況をふまえれば、邦良親王の死もまた第二部を書き継ぐ心の前哨になつてゐると思われる。

邦良親王の亡くなつた時期と符合するように、兼好の歌人としての活躍は歌会などの資料にも見えず、空白の時代である。正中二年（一二三二）撰進の『続後拾遺和歌集』に入集した後、嘉暦元年（一二三六）邦良親王没から、兼好の歌人の表立つた活躍は見られない。次の兼好の活動を示す資料は、建武二年（一二三五）「内裏千首和歌」（170、176『家集』の詞書と題詠）に詠進するまでの約十年近くまで待たなければならぬ。その間、政治の動乱もあり、勅撰和歌集も撰進されていない。更にその翌年、前掲の「細川文庫蔵の『古今和歌集』奥書の報告」によると、

延元々年三月十三日以家説

重授兼好了

権中納言判

とあり、延元元年（一二三六）に二条為定より再び古今和歌集を受講

している事が記されている。

『徒然草』成立と同じ頃、二条派では私撰集『臨永集』と『松花集』が編纂されている。浄弁・能与・頓阿・慶運などがそろって入っているのに兼好だけが入集していない。井上宗雄は『中世歌壇史の研究南北朝期』で、「兼好の個人的事情か何かによって入集しなかった、と推測する以外に現在の段階では考えようがない。」(三二〇ページ)と述べている。その個人的事情とは、まさに『徒然草』執筆に専念していた時期だからと考える。『徒然草』を撰筆した後、歌人としては建武二年(一二三五)内裏千首和歌に七首詠進。翌建武三年(一二三六)に今度は二条為定より古今和歌集を受講し、再び兼好が歌人として本格的に活動を始めるわけである。『徒然草』第一部中断後と同じように兼好が草庵に居住しながら、二条派の歌人として世に名を知られる活躍が続いていくのである。『徒然草』第二部の執筆は、歌人活動の空白の十年の、丁度真ん中の元弘元年(一二三二)頃に位置しているのである。邦良親王の死は無関係とは言えない。

成立の要因に関する具体的理由をまとめて論じたものに林瑞枝の「徒然草と兼好」(『兼好発掘』所収 筑摩書房一九八三年二月刊)がある。それによると、第三十七段までを第一部とし起筆の年代は安良岡説とほぼ同じ頃とし、執筆の動機は、後醍醐天皇との女性問題における確執で勅勘を受けた堀川具親に対する慰めのためであり、その勅勘が解かれて、具親の宮廷生活にかげりがなくなったことによって中断された。第二部の第三十八段が書き始められたのは、十五年後、具親の長子具雅が両統の政変の中で官位剥奪と昇進停止という犠牲になったことによる激情から起筆したとし、その具雅の失意と精神の成長のために書かれたとする。それに若者の心が働き、暦応元年(一二三九)に具雅が十九歳で「菩提心故」の出家をしたという。その翌年に二十一歳の若さで亡くなった、具雅に対する「あふれ出るような同情」と「激情に近い心情の促進によって兼好の筆は再びとられた」(三二七ページ)とする。

何時という視点ではなく、何故という視点で成立を論じたもので管見に入ってきたのは、今のところこの論文だけである。しかしながら、氏の論旨には首肯しえない部分がある。具親は堀川家の当主で『公卿補任』によると兼好より約十歳ほど若く、親しく交流している。前述した『家集』²⁷⁸詞書の

前坊御まへに月の夜、権大夫殿さぶらはせ給て、
の権大夫殿や第二百三十八段の後醍醐天皇の東宮時代の

一、当代未だ坊におはしましし比、萬里小路殿御所なりしに、堀川大納言殿伺候し給ひし御曹司へ用ありて参りたりしに、

の堀川大納言殿も具親であり、懐かしい思い出の場面で行動を共にしていることが書かれている。具親を慰める気持ちには当然あったと思われるが、天皇との女性問題の確執で失脚している失意の本人に対して、第八段や第九段のような、官能的な色欲に迷う男の性を滔々と述べる無神経が兼好にあったとは思われない。その長子具雅に「兼好が人の世に生きる知恵を細々と工夫し、身をまもり心をはぐくむ糧を思いつくままに記し」(林瑞枝「徒然草と兼好」三一八ページ)で、それに動かされ具雅が出家を発心したという、一人の若者の生き方にまで強い影響を与えたとも考えにくい。誰かのための慰撫や指南の書とするには、『徒然草』の内容には、兼好のものの見方の独自性や題材の多岐など、恣意性があまりにも強い。

第一部が書かれてから、邦良親王など兼好と縁のある人や、『徒然草』第二部に書かれている何人かの人々が亡くなっている。当時は正中之変があり、元弘の乱が始まろうとするその直前の不穏な時代である。兼好の生涯の主たる活動は歌人としてであり、『徒然草』はその間を縫って書かれた作品である。『徒然草』第二部を再び執筆することになった要因の一つもまた、第一部中断と逆の意味で、歌人としての活動が少なくなり、こうした時代の環境も逆に、中断された第二部執筆に兼好を向かわせたと考ええる事ができる。第二部は、教養人兼好の、最も知力の深まった四十歳代後半に書かれていて、思想的にも視

野の広がりにも、物事を裁断する視線にも、第一部と比べて見ると、各段に到達した境地を窺わせる。乱世や人々の死を見つめながら時代を裁断する客観的な視座を獲得した兼好の、執筆に向かう新たな環境が整ったためであると考えることが出来る。

四 『徒然草』第三十二段と『花園天皇宸記』に書かれた玄輝門院

本節では第二部が歳月を経て再び書かれたとすれば、その最初の第三十三段を書くきっかけになったものは何か考えて見たい。

第二部の最初是有職故実について書かれている。

今の内裏造り出されて、有職の人々に見せられるに、「いづくも難なし」とて、既に遷幸の日近く成りにけるに、玄輝門院の御覧じて、「閑院殿の櫛形の穴は、丸く、縁もなくぞありし」と仰せられたりける、いみじかりけり。

これは葉の入りて、木の縁をしたりければ、誤りにて、直されにけり。

(第三十三段)

ここにいう「今の内裏」とは、文保元年（一二一七年）四月に閑院殿を模して造営された、二条富小路内裏を指す。と見るのが通説である。

この事柄は『花園天皇宸記』¹⁰第一巻に詳しく書かれている。『全注釈』他の注釈書にも一部指摘されている。以下に本文を引く。

今日密々に新院・玄輝門院御幸、造営を御覧と云々。

（『花園天皇宸記』文保元年三月十一日条）

後日古繪を見るところ、又此の長押無し。女院の仰せの如し。

今度露臺に長押有り。然るべからずと云々。玄輝門院の仰せなり。是れ建長の閑院をこ覧せしむるなり。又鬼間の櫛形の穴、初め鬘櫛の如く雕ると云々。然べからざるの由仰せ有り。仍て雕り直す。又仰せて云ふ、甚だ大なりと云々。今度は一尺許り有る

か。

仁壽殿の東の妻戸相違の事有りと云々。

建暦・建長は廣博と雖も、美を盡くす事今度の如らざるか。賢聖障子の廣さ一丈二尺。并に所々の絹障子、布障子、殿上の簾等續かざる事、先規曾て聞かずと云々。

（同 四月二十三日条）

今日如法密々に玄輝門・永陽門・延明門并に姫宮等入御。如法内々なり。女房参り入るの由なり。朝餉の方を御覧。抑朝餉の御調度心を得ざる物有り。衣筐の如きものに有り。又案有り。簡を付し、御態筥と注すと云々。又大床子の上に、厨子の如き物の上に物有り。作り付けの蓋有り。又冠筥一具有るべきなり。而して二具なり。玄輝門院御覧、知らざるの由を仰せらる。御調度の置き様直さしめ給ふ。是れ故深草院御在位の時、閑院を作らしめ給ひ、諸事忘却せしめ給はず。仍て毎事此の間も申し合せらるゝなり。此の御調度曾て所無きの間、見奉るところなり。新院又所見無きの由仰せらる。又仰せて云ふ、昔閑院の竹臺は格子ヲハ青く漆し、土居等ヲ紫檀の如く彩ると云々。今度は然らず、如何と云々。又御装物所の殿上に小葩あり如何。閑院には無しと云々。又露臺に長押あり。是れ先々には無かりしなりと云々。南殿・仁壽の方を御歴覧の後に還御。夜に入り心を得ざるころの調度等を撤脚す。（中略）仍て女院の御幸を憚らず。抑臺盤所の下の長押の馬形障子、廣さ一間に亘り、人通り難し。先々然るべからざるの由 仰有り。櫛形の穴頗る大なりと云々。是れは今日の仰せにあらず。先々の仰せなり。

（同 二十六日条）

玄輝門院は後深草天皇妃で伏見天皇の生母でもある。『宸記』を書いた花園天皇は孫にあたる。閑院殿は元藤原冬嗣の屋敷であったのが、後に皇居となり、後深草天皇の建長元年（一二四九年）に消失した。建長三年（一二五一年）に新たに造営されたが、正元元年

(一二五九年)に再び炎上した。炎上の時には玄輝門院は十四歳であった。今新院造営の文保元年(一二三一年)は七十一歳の時である。『新大系』脚注一一一ページ)五十七年の歳月を経て、遙か昔、わずかの期間を過ごした閑院殿を、つい昨日のように実に詳細に記憶している。そして新院に何度も足を運び、違いを考証をしていることが『宸記』に書かれている。玄輝門院の、若き日の思い出と簡素な美を大切にしている様子が、人柄として伝わってくる。勿論兼好はこの事実を直接知る立場にはないし、この『宸記』を読む立場にもない。

『宸記』では、玄輝門院の指摘は一つではない。その他多くの事柄も実に正確かつ鮮明に記憶している。兼好が情報として伝え聞いたと思われる「いづくも難なし」という有職の専門家の言よりも、玄輝門院の記憶の方が正しいことは『宸記』の記録が示している。兼好はその事実を見逃してはいない。

この段の「けり」は、「いみじかりけり」一カ所のみ詠嘆の助動詞であるが、他は間接的伝聞の過去を表す「けり」を用いて書いている。その時の事情をよく知る人から兼好が玄輝門院の記憶による考証を聞いたか、或いは当時の宮廷の人々の間でこの事が評判になっていた、兼好の耳にも入ってきたのかと思われる。閑院殿と新院の違いについて、兼好の書いているのは

「閑院殿の櫛形の穴は、丸く、縁もなくぞありし」と仰せられ
たりける

と、櫛形の窓のことだけである。この部分しか兼好が伝え聞かなかったとは考えられない。前章でも考察したように、兼好の執筆の姿勢は事柄をリアルに書き記す事にはない。宮中という閉鎖的な社会における、玄輝門院の若き青春の追憶を、窓によって象徴させているのである。それも伝え聞いたことであるためか、門院の言とは些か異なっている。『宸記』では「鬼間の櫛形の穴、初め鬘櫛の如く雕ると云々。」「徒然草」では「閑院殿の櫛形の穴は、丸く、縁もなくぞありし」と書かれている。この点については、第三者から間接的に聞

いて書いた兼好の言葉よりも、当事者である花園天皇の『宸記』の方が客観的には正しい。兼好は更に「これは葉の入って、木にて縁をしたらければ」と非常にイメージが掴みやすい意識的な解説を加えている。

三木紀人氏は『徒然草全訳注』(講談社学術文庫)一九七九年初版)で

『花園院宸記』にある櫛形の形状の古今の差異はあまりに顕著であり、しかも、この窓の位置と機能からからして、かなり際だった印象を与えたはずで、格別の記憶力・知識・注意力など要しないとされるからである。兼好の尚古思想からすれば、「有職の人々」の認可と遷幸直前という時期にもかかわらず、あえて欠陥を指摘、修造させた門院の行為に、旧世代の持つべき使命感の現れを見て感動したのであり……(二二七ページ)

と述べているが、他の部分の指摘と異なつて、櫛形の穴の窓の形・大きさ・縁の有無などだけが「格別の記憶力・知識・注意力など要しない」と言えるかどうか。旧世代の使命感で指摘したのは玄輝門院の鮮明な記憶もつてであつても、その指摘を尊重して、敢えて修造を実行させたのは花園天皇である。三木氏の評は必ずしも妥当とは言えない。

因みに『徒然草』第二十七段は花園天皇についての段である。

新院のおりゐさせ給て春詠ませ給ひけるとかや

殿守のとももの宮つこよそにして変らぬ庭に花ぞ散りしく

今、この世の事繁きにまぎれて、院にはまる人もなきぞわびしげなる。かゝるをりにぞ人の心もあらはれぬべき。

譲位した後なので新院であるが、歌を書いて、心情に踏み込んだ書き方をしたをした例は『徒然草』では他にない。『徒然草』中、歌を引くのは前段の二十六段の堀川院の百首から引用した

昔見し妹が垣根はあれにけりつばなまじりのすみれのみして

とこの花園院の歌を含めて四首ある。花園天皇の退位は文保二年二月

二十六日であり、第三十三段の新殿造営の時から一年も経っていない。世相を裁断する兼好であるが、現存している天皇の心情をこのように歌を引用してまで書くのは『徒然草』中でもこの段だけである。

十一歳で即位し、二十二歳で譲位した兼好より十四歳若い花園天皇が書いた『宸記』は、天皇十四歳の延慶三年（一一三一）十月朔日から断続しながら約二十三年間書かれている。その『宸記』の最初の日には、若い天皇の玄輝門院の疾病を案ずる一条が記されている。玄輝門院の消息については頻繁に書かれている。右の『宸記』の引用からも、天皇の玄輝門院を尊ぶ心情がうかがえる。

兼好は心を感じたことに對して短い評語で表している。雅な心づかいの女性の暮らしぶりに對して「いと物あはれなり」（第三十二段）、法然上人の、絶体信仰を背景にした融通無碍には「尊し」（第三十九段）、生き方に共感する是法法師に對しては「いとあらまほし」（百二十四段）など徒然草全段をみても人物に對する賞賛の言葉はそう多くはない。その中でこの第三十三段の玄輝門院に對して、兼好が「いみじかりけり」と詠嘆の助動詞を含んで評している。兼好は『徒然草』第一段で「御門の御位は、いともかしこし。」と語り、「ありたきことは……有職に……」と書いている。それを象徴するかのような後深草妃で伏見天皇の生母玄輝門院の、実に詳細な記憶と使命感で有職の鑑定をも糺すという逸話である。その死を伝え聞いて、有職故実に對して造詣を持つ兼好の、内なる思いと感性に深く呼応するものがあつたに違いない。玄輝門院の没年は、第二部執筆の直前のことである。第二部再執筆を促す要因の一つとなつたと考えたい。

五 第二部再執筆の要因―有職故実

第一部ではほとんど書かれることのなかつた有職故実に関する内容が、以降、第二部ではかなりの分量を占めるようになる。『徒然草』はこうした有職故実に関する内容を書き記していることも作品の特徴

の一つである。「何事も、古き世のみぞ慕はしき」（第二十二段）、「衰へたる末の世とはいへど、なほ、九重の神さびたる有様こそ、世づかずめでたきものなれ」（第二十三段）、と家司または藏人であつた頃から、そうした感性を抱く兼好に、歌人としての教養も相乗して、有職故実の関心を蓄積させていた。そして再び執筆する時に、玄輝門院の逝去を知り、兼好の心に鮮やかに甦つた玄輝門院の青春の追憶の逸話が、表現者としての新たな領域を呼び覚ましたと考える事ができる。

続く第三十四段は武藏の国金沢の言葉の考証であり、前述のとおりその後有職故実的な内容が格段に増えている。

第一部では古人の言葉と今様の言葉を取り上げた第二十二段がある。これを有職故実的な段落に入れると第一部では一箇所だけであり、第二部には第三十三段、第三十四段、第四十八段、第六十一段、第六十四段、第六十五段、第六十六段、第六十七段、第九十四段、第九十五段、第九十九段、第一百一段、第一百二段、第一百八段、第一百三十三段、第一百五十六段、第一百七十七段、第一百七十八段、第一百八十二段、第一百九十六段、第一百九十七段、第一百九十八段、第二百一段、第二百二段、第二百三段、第二百四段、第二百五段、第二百八段、第二百十三段、第二百二十一一段、第二百三十七段、以上三十二段、計三十三段の有職故実を題材にした段落がある。この他に有職故実とまでは言えない考証的な段もあり、その区別は難しいが、加えるとその数は六十近くになる。そのほとんどが第二部に書かれている。第一段で「ありたきこと」の中に、「有職に公事の方」と書いた兼好である。生来の教養と宮廷役人としての経験、さらには歌人としての研鑽を積む中で、造詣を深めていった兼好にとって有職故実が極めて関心のある領域である。

第一部と第二部は別の作品ではなく、歳月を経てもそれはあくまで中断である。現存する最も古い正徹の書写本（『正徹自筆本徒然草』静嘉堂文庫蔵 複製本）を見ても製本上下二冊に分かれているが続けて書かれていて、一つづきの作品であることを示している。『徒然草』は

連続した段が連句のように関連していることが多い。第一部三十二段は風情ある光景として兼好の心に残った人のことを書いているが、「その人ほどなく失せにけりと聞き侍りし。」と結んで、その後約十年執筆を中断している。『徒然草』第二部執筆直前の元徳元年（一二三九）に亡くなった玄輝門院は、第三十二段に巧みにつながる有心の付けになり、この先有職故実という新たな題材へ転じる最も執筆意欲をかき立てる人物であつたに違いない。そうした構成上の点でも、玄輝門院の逸話が書き継ぐための契機になったことを指摘したい。

第一部から十年余りの歳月を経て、中断されていた第二部が再び書き継がれる為には、『三』の章で述べた、兼好の社会的な環境が最も大きな要因であるが、題材からも、一つの契機になったと捉えることができるはずである。

有職の知識人として、貞和五年崇光院朝で太政大臣に上り詰めた実力者で当代随一の学者であり、有職研究家としても第一人者である洞院公賢の『園太暦』貞和二年閏九月条には

御百首可付奉行歟可持参歟事

六日、晴陰不定、兼好法師來、和歌數奇者也、召簾前謁之とあり、また同じく、貞和四年十二月二十五日・二十六日条には

年始沙汰件衆著狩衣制符自武家尋事

廿五日、天晴、抑自武家有使者、二階堂三川入道云々、以人間答、年始沙汰始時、件衆著狩衣、而制符何様候哉可承存云々者、下結、無薄物有免之由報了

廿六日、天晴、兼好法師入來、武藏守師直狩衣以下事談之也、今度被用正慶符、彼符趣示聞了

とある。『和歌數奇者』という隠遁歌人として、高師直の狩衣についての相談をしていて、『徒然草』執筆後の兼好の動向を伝えていることはよく知られている。『園太暦』に書かれた二つの記事は、二条派の歌人であり、有職の知識人であると同時に、洞院公賢と高師直とい

う対照的な時の権力者と交流する兼好の姿を象徴的に映しだしている。

好むと好まざるとに関わらず、歌人兼好の人間関係は第一部の時代とは大きく違つてきた。十年の歳月を経て、その執筆のスタイルは、周囲の人々からの聞き語りや個人的な見聞など、第一段の「ありたきこと」「願はしかるべきこと」などの観念的価値観の世界から、具体的な場に題材を移したことによって、広がりや厚みのある人間洞察の世界へと移行して行く。その人間洞察における観想と、生来の知的好奇心や柔軟な感受性が加わって、兼好の内部世界で渾然一体化し、表現の世界に悟道ともいえる言説の冴えをみせている。兼好の思想表現が、第二部では、有職故実だけではなく、仏教思想、説話など、具体的な題材へと移行し、短い章段で、時代や人物造型や事象の裁断に格段の妙味をもつて書いている。作品中にはそれぞれのテーマが数十段ずつの分量で書かれている。そうした分量構成を考えても、玄輝門院の亡くなったことを契機として、兼好の記憶の中に鮮やかに甦つたのは第三十三段の逸話であり、大切にしまつてあつた遠い日の思い出と、有職に対する厳格な思いを表した門院に対する感動と共感が、『徒然草』第二部執筆の嚆矢になっていると考える。

おわりに

『徒然草』の成立に関しては、多くの研究者によつて「何時」という考証はなされてきた。本論文では、ほとんど論究されていない「何故」という視点で考察した。中断と再執筆について、史実に基づいて、兼好の内的・外的要因を探っていくと、新たな兼好像があらわれってくる。家司・宮廷役人の時代は『徒然草』も書かず歌人としての活躍もない。その生涯の主たる活動は二条派の隠遁歌人であるが、『徒然草』は歌人として世に出る前と、歌人としての活動の比較的空白の時間があつた時代に書かれている。その執筆に専念している時には、

二条派私撰の『臨永集』・『松花集』にも参加していない。兼好の活動は複数の事柄が重複する事が極めて少ない事実が浮かんでくる。その時々一つのことに軸足をおいた兼好は、生涯『徒然草』と『兼好自撰歌集』の二作のみをのこし、しかもその『徒然草』も生前世に出たすことはなかった。歌人として、洞院家と比較的親しい関係にあった兼好であるが、同時代の『園太暦』にも「和歌數奇者」という隠遁歌人の兼好があっても、『徒然草』の作者としての兼好はいない。有職の知識人としての評価は、『徒然草』を書いた兼好ではなく、それとは無関係に兼好自身に由来する。兼好というストイックで複雑な人間性と呼ぶ。

この論は、『徒然草』における兼好の人間論的探求の第一段階である。今後さらに、兼好をめぐる時代背景・作品に登場する関係人物を考察し、中世史の周辺で独自の視点で書かれた『徒然草』の内なる世界を明らかにしていきたい。

注

- (1) 『註つれぐ草通釈下』（慶文堂一九四一年刊）後、『日本古典全書』（朝日新聞社一九四七年一月刊）で一部訂正。
- (2) 市古貞次編『諸説一覽徒然草』所載 福田秀一「徒然草の成立」p. 71（明治書院一九七〇年刊）・『徒然草講座』第二巻福田秀一「徒然草の成立」（有精堂一九七四年七月刊）。
- (3) 『徒然草全注釈』下巻所収（角川書店一九六八年五月刊）。
- (4) 『兼好』p. 199（ミネルヴァ書房二〇〇五年五月刊）。
- (5) 『中世歌壇史の研究 南北朝期』p. 204（明治書院一九六五年十一月刊）。
- (6) 『花十首寄書』『頓阿法師詠と研究』底本宮内庁書陵部本（未刊国文資料刊行会一九四六年刊）。
- (7) 『歴代残闕日記』所収「繼塵記（実任卿記）」（歴代残闕日記刊行会一九七〇年三月刊）。
- (8) 田中道夫「兼好の古今伝授について」細川文庫蔵 三条西実隆筆『古今和歌集』奥書の報告（日本文学研究資料叢書『方丈記・徒然草』所収（有精堂一九七一年七月刊・初出 佐賀大学「文学論集」第四号 一九六二年刊））。

- (9) 新日本古典文学大系『方丈記 徒然草』p. 110の脚注による（岩波書店一九八九年一月刊）。
- (10) 村田正志編『和花園天皇宸記』第一巻（統群書類従完成会一九九九年十月刊）。